

外国人研究者ということ

加、仏、米、日の文化体験から考える

エティエンヌ・フォレ

総合研究大学院大学加速器科学専攻/高エネルギー加速器研究機構

カナダのケベック州に生まれ、フランス語を母国語として教育を受け、アメリカ東海岸に留学し、西海岸で就職。その間、在日韓国人3世の女性と結婚し、1995年からつくばの高エネルギー加速器研究機構に勤務。そんなフォレ博士が卒直に語る「日本で仕事すること、暮らすこと」

アメリカに嫌気がさして来日

高エネルギー加速器研究機構(KEK)に来ることになった理由の1つは、子どもの教育問題です。それまでは、カリフォルニアのローレンス・バークレー国立研究所(LBNL)で約10年働いていました。カリフォルニアではある時、教育への予算配分が大きく変更されて、金持ちの住んでいるところにだけ優秀な公立校が存在し、公立校全体としては、全米で後ろから2、3番のレベルになったのです。

よい公立校のある地域の家の値段はべらぼうですし、私立校の授業料は高い。2人の子どもの教育をどうしようかなあと思っていた時に、仲のよかった同僚が研究所を首になったんです。人間的にはとてもすばらしい男だったのに、上の人には扱いにくいタイプでした。

これが引き金になって、カリフォルニアに、アメリカにおさらばしようと思った。カリフォルニアの政治風土も大嫌いだったし…。

KEKの加速器物理の研究者の評判は高く、知っている人もけっこういたので、すんなり来ました。もちろん妻が在日韓国人だったということもあります。でも彼女は米国暮らしが大好き

なんです。まあ、独身者でもここに来たでしょうが、欧米人がパートナーだったら別ですね。子どもの教育問題など、やはりたいへんでしょうから。

どこでも1人で仕事を進める

私の専門はビーム力学で、加速器のビーム粒子の運動を数学的に表すことです。これをもとにコンピュータシミュレーションを行い、加速器リングの形を決めていきます。

ビーム粒子の運動の表し方にはいろいろありますが、リングの中で粒子を何百、何千億回とまわしていくと、表し方のちょっとした要素が拡大されて、自然界では起こりえないことが、シミュレーション上では起こるようになる場合があります。ひと昔前に、こういう現象を防止する方法を開発しました。

また、ビーム径も、粒子を衝突させるところでは電磁石を使ってうんと絞らなければならないなど、一定ではありません。いわば、細くなったり太くなったりと波打っているわけで、そういう状況での粒子の運動は複雑になり、追いかけるのが難しい。私は「ノーマル・フォーム」という写像法を開発し、運動を単純化して表すことができるようにしました。こうすれば、解

析が非常に楽です。

プロジェクトに巻き込まれるのが苦手で、LBNLでもKEKでも、ほとんど自分1人で研究を進めてきました。もちろん同じ分野の仕事仲間と協力しあうこともありますが、海外の人たちが多くですね。

KEKではビーム力学の研究者を素粒子の理論家と同じように扱ってくれるので、仕事を進めるのは楽です。

日本で働くということ

LBNLもそうですが、アメリカのプロジェクト研究の組織は、ものすごい階層構造になっていて、あたかも軍隊のようです。命令系統が実にはっきりしています。日本人研究者には、アメリカ式は息苦しくて嫌だという人が多いですね。

反対に日本のプロジェクトは、とってもあいまいです。参加した外国人研究者、とくに短期間参加した人からは、文句を百も二百も聞かされました。「自分が何をすべきなのか、誰に聞いてもわからない。自分の担当者というものがいない」と…。

ここでちょっと触れておきたいのは、日本人の欧米流に対する誤解です。欧米人が上司のことを拒否する姿を見ると、すぐに日本人は「これこそ欧米

流の自由だ」と思い込みますが、まったく違う場合が多い。

欧米社会というのは、契約書、法律、聖書、そういう記述されたルールに従うしくみになっています。だから上司が書いてあること以外のものを要求すれば、当然拒否するわけです。

明文化されていないことを欧米人の部下に次々と要求し、反乱を起こされた日本人上司の例も知っています。私の見るところ、その辺の扱いは、中国人や韓国人のほうが上手ですね。

物事の明快性と永続性を好むのが欧米文化です。一方、あいまいさで人間関係を円滑に保とうというのが、日本文化だと思います。ですから、KEKの国際化構想というのは、たいへんなことでしょう。文化が変わらない限り無理だとさえ思います。

個人的には、私の仕事の進め方は、今のところ、日本的システムと真っ向からぶつかるものではありませんし、日本的システムには柔軟性があっていいな、と思うこともあります。

例えば、仕事場のノートパソコンを家にもって帰って、家で仕事することも自由です。これがアメリカですと、職場の電球1つも自由に換えられません。換えたために、何かが起こったら責任問題になるからです。ア

アメリカの研究所の官僚主義は、ある意味で日本の比ではないところがあります。

日本で暮らすということ

外国人研究者が日本で暮らす時の大きな問題の1つは、子どもの教育でしょう。とくに何年もと長期になれば…。

KEKとしては、つくばにはインターナショナルスクールがあるから、そこに行ってください、というスタンスです。しかし、インターナショナルスクールでは英語で授業が行われており、英語を母国語としない人には意味のないこともあります。それに教育には知識の獲得だけでなく、暮らしている社会との繋がりを認識させるという面もあります。これは、人間が生きていくうえで非常に大事なことです。

日本の社会は、外国人への偏見や尻込みをなくして、オープンにならなければなりません。子どもたちをインターナショナルスクールに閉じ込めるのではなくて、日本の学校で受け入れることが大事でしょう。

私の13歳の息子と11歳の娘は、日本の学校へ行っています。アメリカ生まれで、国籍はアメリカですが、最近、日本の永住権をとることができました。カナダ人の父と在日韓国人の母をもつ子どもたちが、暮らしているのは日本です。

私は、子どもたちには、育った環境の文化をちゃんと身につけ、暮らしている社会に対してきちんとしたアイデンティティをもってほしいと思っています。将来、私がカナダに戻ることもあっても、彼らが無理に同行する必要はありません。

ただ日本国籍となると、これは望んだところで、一筋縄ではいきません。妻は日本国籍をとりたいと思っていますが、そのハードルは非常に高い。カナダ



撮影：由利修一

Joseph Cham Eugène Étienne Patrice Forest：メリーランド大学でPh.D.を取得後、ローレンス・バークレー国立研究所(LBNL)のスタッフ・サイエンティストを経て95年から現職。97年からLBNLの“Advanced Light Source project”にも協力。1998年に463ページの大著“Beam Dynamics---A New Attitude and Framework---”(Harwood Academic Publishers)を出版。趣味はフィッシングだが、日本の河川や湖の釣りのルールのいいかげんさに、怒りを感じている。

人と結婚し、仕事ではなく家庭をメインにしている生活では、非常に難しいのです。

日本と欧米の教育の違い

私自身はケベック州で初等教育を受けましたが、1960年まで州政府ではなく、カトリック教会が教育を支配していたのです。この状況を日本人に説明するのはとても難しい。非常に厳しくて、悪ふざけなんかとんでもないし、欧米第一主義で暗黙の人種差別もありました。また、女性差別もあって、大学進学を阻んでいました。いうなれば最悪…。

中等教育はフランス系の学校で受けましたが、ここの教育はある意味で日本と正反対といえます。選択問題なんかまったくなく、何事につけてもきちんと書きくださなければならない。そしてフランス語と数学を徹底的に教える。フランス語への愛着と誇りは、外国人には想像を絶するところがあります。でも「カタカナ文化」に溺れている最

近の日本の軟弱ぶりを見ると、あれもいいと思う。

数学に関しては、世界で唯一数学を数学として教えてきたのがフランスでしょう。アメリカをはじめ、他の国では何かの手段としての数学であり、日本や韓国はこの面の教育に成功をおさめているともいえます。まあ、最近では、フランスでも手段化が進行中ですがね。

いずれにしろ欧米の教育システムは「人間は1人1人違う」という視点の上に成り立っています。ですから学力にも当然差があり、これはいかんともしがた。最もよい教育システムとは、1人1人がその違い、個性に適應できるようにすることだと考えられています。日本の場合は、どうやら「みんな一緒」がキーワードのようですね。

総研大にはこういう問題はないでしょう。一般的な大学の教育システムの土壌から離れています。ここでは、個人の研究成果がすべてであり、学生の目的

はただ1つ、「博士号をとること」。実ははっきりしている。

これからのこと

アメリカに嫌気がさしたといいましたが、正直にいうとアメリカへの思いはアンビバレントです。たとえフランス語訛りの英語をしゃべっていても、白人にとっては住みやすいところですし、何しろ大きな国ですから、パラドクスに満ちあふれ、人々を引き付けてやまない魅力があります。アメリカ社会に対して強い一体感を抱いていた時期もあります。

子どもたちが少なくとも18歳になるまでは、日本の社会・文化の中で育てたいと思っています。あと6~8年はおそらく私は日本の公務員のままでしょう。

最近では自分がケベックに、あの緑と湖に強く結びつけられているのを感じます。結局、終の住みかはケベックなのでしょう。

(取材構成 由利伸子)